

令和3年11月15日

人権教育だより⑥

人権感覚の涵養 ～他者の人格を尊重し、自己肯定感の向上を図ろう

江津工業高等学校人権教育担当

今回は、「責任は取れるのか」というテーマでみなさんと考えてみたいと思います。



プロ野球選手で、「平成の怪物」と言われた松坂大輔投手が今季を限りに引退しました。その引退会見で松坂投手は、

「たたかれたり批判されたりすることに対して、それを力に変えてはね返してやろうと思ってやってきましたが、もうやっぱり最後はそれに耐えられなかった。最後は心が折れたというか、エネルギーに変えられたものが、受け止めてはね返す力がなかった」
朝日新聞デジタルから引用

と述べました。これに対し、西武ライオンズで同時期に活躍したG. G. 佐藤さんはツイッターで、

「松坂大輔ほど実績があつて、お金を稼いでる人でも誹謗中傷を相手に心を折る。それくらい誹謗中傷っていうのは恐ろしい。誹謗中傷は止めよう」と呼び掛け、SNSなどの発信の前には「悪意がなくても投稿する前に『これは相手が傷付かないかな?』と一旦考えよう」と訴えました。

東京中日スポーツから引用

さて、みなさん

松坂選手の折れた心は、

誰かが責任を取って、直してくれるでしょうか。

責任を取ることなど誰にもできない

内田樹（うちだたつ）さんの『困難な成熟』（出版社:夜間飛行）という本の中の一節を紹介いたします。第1章「社会の中で生きるということ」からの引用です。

(途中、一部省略しています)

人を傷つけたり、人が大切にしているものを損なったりした場合、それを「復元する」ということは原理的に不可能です。

あなたが配偶者とか恋人に向かって、「あなたのその性根の卑しいところが我慢できないの」とか、そういうめちゃくちゃひどいことを言ったとします。でも、言った後に「これはあまりにひどいことを申し上げた」と深く反省して、「さっきのなしね。ごめんね。つい、心にもないことを言ってしまって…」と言い訳しても、もう遅いですよね。「ごめん」で済む話はほとんどありません。どのような損害であれ、それを現状に復元して、「なかったこと」にすることはできません。だから、「もう起きてしまったこと」について「責任を取る」ということはできないのです。

だから、私たちが「責任」についてできることはひとつだけです。

「責任を取る」ことを
求められるようなことをしない
それだけです。

